どして使用するため、電気柵などで樹木をチンパンジーから保護をしなければ、樹木が長期にわたって生育しないと思われてきた。しかし京都大学霊長類研究所では、チンパンジー屋外放飼場に大小さまざまな多種類の植物を生育させることに成功した。これは、チンパンジーが利用できる三次元空間をじゅうぶんに用意し、給餌回数を多くし、チンパンジーの興味を分散させるためおもちゃを入れたり数度にわたって植樹をおこなうなどの環境エンリッチメントによる成果が大きいと思われる。また、植物の生育によりチンパンジーの採食時間が延び、行動レパートリーが増加したことが示唆されている。本年度の研究では、これらの結果について補足調査をおこなうことで、より確実な調査結果が得られた。また、現在までに植樹された樹種について、資料をもとに表にまとめた。これにより、チンパンジーが採食する樹種には選択性があり、その好みの傾向は科により異なることが明らかになった。調査期間中には、10 ヶ月齢のチンパンジーの子供が、母親以外の個体の採食する行動を注意深く観察し、その後同じ植物を口に入れる行動も観察された。

資料6

霊長類における自然法則の認識とその発達

藤田和生（京都大・文・心理）

前年に引き続き、霊長類乳児が環境に関する物理的知識を獲得する過程を調べた。本年度は、ケージ室飼育のニホンザル2頭、アカゲザル6頭、放飼場飼育のニホンザル13頭、及びチンパンジー3頭を用い、関節点に光点をつけて暗黒を運動させる、いわゆるバイオロジカルモーション (BM) の認識に及ぼす生育経験の効果を分析した。被験体乳児を垂直に保持し、ヒトの BM とサル（あるいはチンパンジー）の BM 及び、それらの光点の位置をでたらめに並べ替えたものを、正立・倒立を対にして提示し、それぞれに対する凝視時間の割合を分析した。ケージ飼育のマカクは、生後0週齢から17週齢まで1~2週間ごとに反復検査した。群れ飼育マカクは7月と10月に検査した。週齢は1~22週であった。チンパンジーは0~6ヶ月齢まで約1ヶ月ごとに反復検査した。その結果、ケージ飼育個体については、8週齢から15週齢の間、ヒトの正立 BM をその倒立より長く見る傾向が見られた。一方、群れ飼育個体については、4週齢から13週齢にかけて、逆にサルの BM をその倒立より長く見る傾向が見られた。チンパンジーでは、4~6ヶ月齢において、チンパンジーの正立 BM を倒立よりよく見ることがわかった。これらのことから、BM の認識には実運動を数多く見る経験が重要な影響を持つことが昨年にも引き続き示唆された。物体の一体性の認識についても分析したが、明瞭な結果が得られなかった。チンパンジー成体の時空間情報の知覚的統合に関する実験的分析を引き続きおこなった。

資料7

サル類の老人斑および脳血管アミロイド症に関する研究

中村紳一朗（日本獣医畜産大）

今年度は材料提供がなかったので、カニクイザルの presenilin-2 の免疫組織化学的研究を紹介する。

Presenilin はアルツハイマー病に見られる老人斑形成に深く関わる蛋白で、Presenilin-1 (PS-1) と-2 (PS-2) の2種類が知られている。両者は相同性の高い蛋白だが、それぞれの局在や機能の違いについては明らかでない点が多い。そこで胎仔から老齢のカニクイザル脳を用い、